

# 会員のば

## 箱根駅伝から

札幌市医師会  
天使病院

高橋 伸浩

スポーツ観戦を趣味としている私にとって、一年のスポーツ観戦は箱根駅伝から始まります。今年の箱根駅伝は青山学院大学の2年ぶり5回目の総合優勝で幕が閉じました。

近年の駅伝ブームは、自身が高校生の頃よりの箱根駅伝ファンでしたので、とても喜ばしいことと感じています。

過去には昭和の時代の優勝常連校である古豪の早稲田大学、中央大学、日本体育大学をはじめ、昭和から平成の時代に強豪として名を馳せた順天堂大学、平成の時代の優勝常連校である山梨学院大学、大東文化大学、東洋大学、駒澤大学、神奈川大学、そして今後の令和の時代を築いていくであろう青山学院大学、東海大学など思い出深い大学がたくさんあります。

今やマラソン選手の登竜門としての地位を確立しつつある箱根駅伝ですが、その中でも多数の記憶に残る名選手が排出されています。

特に記憶に残る選手では、箱根の山登りである5区を任されてさまざまなドラマを見せてくれた「山の神」と称された選手の存在が忘れられません。

2005年から2007年に3年連続区間賞を獲得した順天堂大学の初代「山の神」である今井正人選手、2009年から2012年の4年間連続区間賞を獲得した東洋大学の柏原竜二選手、2015年から2016年の青山学院大学の連覇に貢献した神野大地選手の3名がいまだに語り継がれます。

今年の5区は大きなドラマもなく箱根駅伝は終了しましたが、来年以降も5区を中心として箱根駅伝に注目していきたいと思います。

## ペットロス症候群対策

札幌市医師会  
円山リラクティック

森田 裕子

困ったことに、我が家の最後の愛犬が16歳半になってしまった。

今から22年前、当時小学校6年生だった長男が下校途中に毎日寄り道をして覗いていた近所のペットショップで運命の出会いをしたシーズーのエミー、エミーが1歳半で産んだ娘のラウラ、今頑張っているトイプードルのココ、そしてココが1歳半で産んだバニラの4匹との賑やかな生活がずっと続くものと思っていた。思い返せば、小学生の頃の愛読書が月刊『愛犬の友』だった。夢はたくさんの犬たちと一緒に大きなベッドで寝ることだったので、まさに夢が叶ったということだ。平熱が38℃の4匹と一緒に寝るのはなかなか大変だった。服のまま温泉に浸かって汗だくの夢や、服のままプールで泳いで溺れそうな夢をよく見たものだ。朝夕の4匹の散歩は家族皆でシフト制にしていた。朝は私、夜は3人の子供たちである。子供たちは体調や試験などの個人の事情によりシフト交換するのだが、記憶違いが原因で喧嘩になったりもする。そんなドタバタな生活が懐かしい。

4年前にエミーが18歳で、その2ヵ月後にラウラがママを追いかけるように16歳で天国に逝ってしまった。2匹とも1ヵ月間の介護生活だったが、その時間が有り難かった。お見送りの心の準備ができたからだ。

昨年の6月、腎不全だったバニラがママより先に逝ってしまった時は、1日半寝ただけのアツという間のお別れだったので、心の準備もできずペットロスになってしまった。外来をしても涙が出てきて、泣くのを我慢すると動悸がしてくる。辛くて仕事にならないので安定剤を飲みながら働いてしまった。

そんな私を心配して『ココがいるうちにもう一匹飼いなさい』という友人たちは、皆多頭飼いをしている人たちだ。ご親切にペットショップの仔犬の写真や動画をLINEで送ってきて大いに刺激してくれたりする。一方、『お別れが辛いんだからもう飼うのはやめなさい』『この歳で新たな命を最後まで責任持って担えないでしょ』というもっともな意見を言う友人もいる。社会人になった子供たちは全員関東に住んでおり、具合悪いからちょっと面倒見て！という訳にはいかない。娘は、最後のココが虹の向こうに行ってから考えた方がいいと言う。いつでも関東の孫たちに会いに行ける。そんな自由を味わってみたいと言うのだ。

それでもペットロス症候群が再発したら飼えばいいのかもしれない。対策を考えながらココと散歩する毎日を送っている。